

# 巻頭言

—本特集を企画するにあたって—

Guest editor 藤原 靖弘\*

アレルギー疾患は、アトピー性皮膚炎、食物アレルギー、喘息、アレルギー性鼻炎に代表され、アレルギー(アトピック)マーチとして知られる。近年、さまざまな要因(衛生仮説、環境因子、腸内細菌、抗生剤など薬剤多用、*Helicobacter pylori* 感染率低下など)によりアレルギー疾患は増加してきている。

食物アレルギーにおける抗原感作や免疫寛容の場が消化管であり、消化器内科医として食物アレルギーの最新の診断法や治療法などを理解すべきである。また近年注目されている消化管アレルギー疾患として、好酸球性食道炎、好酸球性胃腸炎、新生児・乳児食物蛋白誘発胃腸症を含む好酸球性消化管疾患(eosinophilic gastrointestinal disorders; EGIDs)が挙げられる。好酸球性食道炎は本邦ではまれと考えられていたが、近年増加傾向にある。このような増加は疾患認知度向上のみでは説明できない。さらに、胃がん検診の普及している本邦では上部消化管内視鏡検査で偶然見つかる無症候性好酸球性食道炎も存在し、その自然史の解明が待たれている。一方、好酸球性胃腸炎は食道以外の消化管を病変の主座とする疾患群であるが、最近臓器ごとに好酸球性胃炎、好酸球性十二指腸炎、好酸球性小腸炎、好酸球性大腸炎と定義する傾向にある。罹病消化管が複数存在する症例や好酸球浸潤範囲(粘膜優位型、筋層優位型、全層型、漿膜下優位型)により病状は大きく異なることも疾患の特徴を複雑にしている。

EGIDsの病態に関して、とくに好酸球性食道炎についてさまざまなサイトカインや炎症細胞の役割が詳細に解明されつつある。しかし、本邦ではステロイド以外保険適用がないのが大きな課題である。2022年FDA(米国食品医薬品局)は好酸球性食道炎に対して初めて生物学的製剤であるデュピルマブを認可した。好酸球性胃腸炎は難治例が多く、ステロイド依存例もみられることから、生物学的製剤の開発が求められる。EGIDsは指定難病であり、厚生労働省研究班より新生児・乳児と幼児・成人の二つのガイドラインが発行された。

その他の消化管アレルギー疾患としてセリアック病が挙げられる。セリアック

Yasuhiro Fujiwara

\*大阪公立大学大学院医学研究科消化器内科学(〒545-8585 大阪市阿倍野区旭町1-4-3)

病は T 細胞が関与する小麦成分グルテンに対するアレルギー疾患であり，病名はよく知られているが本邦ではまれであるため，疾患認知度は低い．現在，日本消化器病学会関連研究会であるアレルギー消化器疾患研究会（代表：穂苅量太教授）を中心に多機関臨床調査研究が進行中である．

このような背景をもとに本特集を組ませていただいた．各項目はその分野のエキスパートの先生方に執筆をいただいております．消化器内科の診療に携わる医師，看護師，メディカルスタッフとして必要な知識が得られると考える．